

虹 二 題

このまへから「寄せ書き」といふ欄をあらたに設けて、比較的
みじかいものをおさめることとし、その最初として、前田金五
郎と金田一春彦の両氏に書いてもらった。それにつき、編集主任
としてさういふ企画をたてた手まへ、わたくしもそのなかまに加
はったことは、読者諸賢、すでにご承知のところ。このたびは、
ひとつ、虹をめぐって、両氏のとりあげた問題にまつはること
を、ここに、書きとめてみたい。

一、万葉集の「弩自」

金田一君によると、伊豆利島におこなはれる「行クノীগ」と
いふかたちの「ノー」は、万葉集の東歌など東国関係のものにみ
える推量の助動詞「なむ」の「後身」ではないかといふ。ここ
に、わたくしは、独自の判断にもとづいてそれを肯定なり否定な
りするだけの力はない。古代語の方言形がずっとこんにちにまで
ならなかのちで伝存することは、ありうることである。ただ
し、いまは、大まかなかたちで一般的にいふと、現代の諸方言に
みられる諸特徴のうちで中世以前にさかのぼりうる残滓の現象
は、きはめてかぎられるやうに思ふ。これは日本語の歴史を考へ
るうへに興味ふかい問題である。しかし、これは、反面におい
て、そのやうな残滓の現象があればせむつきとめてみるべきこと

を、当然、要請としてそこにふくんである。それだけに、「行ク
ノীগ」の「ノー」がはたして東国の古代方言に直接にさかのぼ
ってゆけるものとすれば、すでによくいはれる命令のかたちの
「ロ」などとともに、これはまたこれとして興味のみかい例とな
るわけである。

さて、文法的要素に比すれば、実質的な意味をもった個々の語
については、いっそうそこに古代方言の痕跡をもとめがたいかも
しれない。ただし、なかんづく、個々の語のばあひには、なにが
廃滅をまぬかれた古代方言の「後身」とみとめられるか、そし
て、それらがどれだけあるかまたはどれだけしかないか、のごと
きは、ひとつびとつの例をあらってゆかなくては論じえない。こ
れは、いまのわたくしには手に負へないが、しかし他面——たと
へ「後身」としてじっさいにのこるものの数はかなりとほしいで
あらうとも——すでにはじめに述べたやうに、そのやうな後身の
存在そのこと自体は、当然、期待される。この（理論的）期待に
こたへるであらうものとして、東歌にてくる《虹》をあらわす
かたちは注目にあたひするものとかねてわたくしは思つてきてあ
る。実例は、三四一四番の歌に、たゞ一例、つぎのやうにあらは
れる。

伊香保呂能夜左加能為提爾多都弩自能安良波路万代母佐禰乎
佐禰氏婆

（伊香保らの八坂の井手に立つ弩自のあらはる（甲）までもさ
寝をさ寝てば）

ただ一例ではあるが、このばあひ、この「弩自」が虹に言及す

るものであることはうたがひないであらうし、したがって、虹をあらはすに「脩自」と書かれるうかたちの存在したこともうごかないであらう。

東歌にはゆる上代特殊かなづかひの甲乙の混同がある程度までみられることは、たしかである。しかし、混同例は、やはり例外とみるべきものといふのがわたくしの考へである。この混同の現象をいかなるものとして解散すべきかについては、かつて考へを述べたことがあるからこゝにはくりかへさない。要するに「脩自」は、かながきすれば《ノ(甲)ジ》となるかたちである。これは、いはゆる甲乙の混一以後のかたちとしては《ノジ》である。他方、奈良時代に畿内の方言において《虹》をなんといったか、おそらくは《ニジ》にあたるかたちであつたらうとおもふけれども、この点は文証がないからわからない。しかし、それが《ノ(甲)ジ》であつたとしても、いまは、さして、さしつかへない。つまり、ここでは東歌の《ノ(甲)ジ》がその当時までさかのぼって東国特有のかたちであつたかどうか、そこまでは資料の関係上わからないとなければならないわけであるが、しかしとにかく平安時代の京都では《ニジ》のかたちもあつてゐるからには、もし、その時代にも東国の方では依然として《ノジ》のままであつたとすれば、これは《ニジ》とのへただりにおいて、すでにあきらかに東国的といふべきである。問題は、ながく中間の時代の方言資料が欠けてゐるところにあるわけだが、しかしながら、明治以後において報告されてゐる関東・東北の諸地方の《虹》の方言は、他の地方と排他的に対立しつつ、圧倒的に《ノジ》で

ある。これは、万葉集以来のかたちをそのままつたへてゐるものと解して、それを否定することはできない。すなはち、理論的にいへば、おなじくこのやうな結論へみちびかれる類例が他にあるかどうか、ないしはその多寡は、この結論そのものを、そのものとして、なにも左右はしない。奈良時代の東国方言の特徴をなしてゐた要素は、こんにちではたゞ一語の存在においてしかもはやあつけないといつたばあひも考へうるわけである。ただし、これはどこまでも例を《ノジ》の一語にきつくしぼって、そこから出てくる問題を方法的にせめてみたばあひのはなしである。わたくしの大きな関心、それは、全体としてみて、どこまで古代東国の方言(の諸特徴)が後世の風波にたへて残つてゐるか、あるいは、いかにそれが消されてしまつたか、といふ歴史の問題である。つまり、現代における方言の《ノジ》は、奈良時代のかたちをそのままつたへてきてゐる蓋然性があるわけなのである。

さて、本論として述べようとしたことはみぎをもつてはつたが、つぎに、ひとこと注記をくはへておく。わたくしは、たとへ文献上の徴証は欠けてゐても、畿内方言においては、奈良時代においても、《ニジ》といふかたち(やかましくいへば、《ニジ》に対応するかたち)が《虹》をあらはしたものであつたらうと、じつは、やはり考へてゐるのである。そのことを、ここに、もつとはつきりと表明しておかう。なぜなら、《西》や《国》や《谷》は、奈良時代でも《ニシ》や《クニ》や《タニ》に還元されるかたちであつて《ノ(甲)シ》や《クノ(甲)シ》などのかたちではないし、また《野》や《嶽》もおなじく《ノ(甲)シ》や《シノ(甲)シ》

に還元されるかたちであつて、《ニ》とか《シニ》とかのかたちではない、つまり、《ノ(甲)》(ニ奈良時代)・《ニ》(ニ平安時代)のやうな対応例は、もし存在するなら、まったくの例外でないからである。(ただし、これ以上のことは、もはや論じない。たとへば、われわれは《ニジ》と《ノジ》とを、あたまから同源の語ときめてかかることはできない、たとへ、同源にはちがひないかもしれないにせよ。)

二、憂の息

前田君の報告については、その豊富なゆきとどいた例示と謙抑な実証の態度とに敬服のほかない。ただ、ひとそれぞれにおのづからおのれの関心の中心といふものはあることゆゑ、かれは、そのとりあげる対象に、主として、「蛇の息」の方をえらんだし、その目ざすところは、ひとへに江戸時代のことばの資料の記述にかかつてゐる。そこで、問題への照明をやや転じ、ここに、ひとつには《がまのいき》の例の追加として、ひとつには、時代をさかのぼる例の指摘として、まづいささかおぼえがきのふでをとる。にじを蛇のいきとする伝統はたしていつまで文献的にさかのぼれるものか、いま、その方は知らないが、これをがまのいきとする伝統はすくなくとも鎌倉時代にまではさかのぼりうる。すなはち、塵袋(巻一)に、つぎの記事がある。

一、虹ト云フハ、何レノ所変ゾ。蜘蛛ノイキ歟。

虹ハ日輪ノメグリノ半ヨリ上ガアマグモニ映ジテミユル也。

博聞録ニ虹霓ハ但是レ雨中ノ日影ナリト云ヘリ。虹ハヲニ

ジ、霓ハメニジト云フコトアレドモ、イキ物ニアラネバ実ノ雌雄モアルベカラズ。サレドモ、虫篇ヲシタガヘテ動物ニ思ヒナラハセルユヘニ、字対(引用者註、むしろ語対といふべきところ)ニモ動物ニ用フ。実義ニハソムケリ。雲ノウスキ所ニハ虹モウスクミユ。又影ウツロヒテ別ニウスキ虹ノ見ユルコトモアリ。是等ヲワキテメニジヲニジト云フ歟。日西ニアレバ虹ハ東ニアリ。カゲノウツルニムカヒテ見ユ。ソラノ日ノ勢ヲ見レバ、ワヅカナル日輪トオモヘドモ、カゲニウツセバイカホド大ナリトモアヤシムベキニアラズ。(下略)

(珍書同好会刊、油印本に拠り、私に清濁、句点を加ふ)

ここで思想的に注意されるのは、著者が虚妄の説をしりぞけてゐることである。これに対し、汎神論的な世界観を楯に、現象的世界の経験的所与を因果性に還元して把握しようとする合理主義を攻撃するところの、興味ある見解を紹介しよう。かいつまんで引用するが、それは、つぎのやうな如偏子の議論である。

○ある人はいはく。我家の儒学に天理をきはめ物理をきはむる事、明白眼前にして、仏説虚偽の及ぶ所にあらず。今その二三理をいふて、儒仏理のまこといつはりをあらはししらせむ。仏者の詞に……雨後の虹は蛇蟻龜の吹息なりと云(ひ)な……す。この説……いつはり也。儒理には……虹は向陽の気也。今すなはち我水をふくみ夕陽にむかつてふかに虹あらはるべし。何ぞ蛇蟻龜の吹息とせん。

虹の事、汝がいふ説はまことに似たる虚言也。其いはれは夕

陽に向ひて水を吹(く)に虹をなす事さもあるべけれ共、其儀をもつて雨後自然の虹を蛇蟠(じにま)の吹気と云(ふ)はいづはり也とはいふべからず。汝水をふくみ夕陽に向ひて吹(く)ゆへに虹をなし、吹ずは虹立(つ)べからず。爰をもつて雨後の虹もかならず吹(き)たつる主司ありと察すべし。其(の)吹(く)こと何ものなれば汝知(し)や。蛇蟠(じにま)の三虫(さんちゆう)は水氣(すいき)をかざり……(百八町記 卷二、一ウ—三ウ—ただし、句点、清濁は、原本のままならず)

* * *

以上のわづか二例をもつて、わたくしの著示したいとおもふ文証はつきるのであるが、わたくしがこのやうなことに關心をいだいてきたについてはまた、それなりのわけ、つまり、わたくしにはわたくしなりのある理論的な問題意識はあつてのことである。とはいへ、理論的な問題へふかいることは、いまはふさはしくないから、多少は考へてあるところも、なまぐらなかつたではきたすにとどまるが、とにかく、たとへば、『おじやのいき』は、語であるか、語でなければいかなる単位であるか」といふやうなかたちの問ひは、言語の研究ではその課題としてはっきり理論的には出してゐないとおもふのである。わたくしも、いま、直接にそれを問題としてとりあげようといふわけではないが、しかし、しやれ、ぢぐち、ことわざ、これらすべて、くちずさみとしてみれば、それらのひとつひとつ、いづれも、一個の完結した作品であり、民俗学はそれをそのやうなものとしてとりあつかはうとするものとみとめられるが、他面、それは、そのまゝ、また、

慣用のかたちで、表現の素材でもある。もし類比にうつたへてこの点を敷衍するならば、民俗学は民衆のくちずさみを民芸品としてとりあげようとするものであり、民俗学自体、このやうな類比の可能性をその方法の基礎にすゑてあると考へられるのであるが、われわれは、それを、それ自体の価値において抽象しないで、いはば——つぎの譬喩がどこまで適切かはともかくも——精神の交換の生活における通貨のかたちでとりあげてみるのである。譬喩をはなれ、また《意味》といふあはずれ女のやうなことをそのまゝつかつて、ひとくちでいへば、わたくしの關心は、つまりはうへにいふやうな慣用の単位の意味論的研究にかかるのである。それを虹にことよせて断片的にかたるならば——

虹の出現において、古代の民衆は、季節感をそゝるはかない詩的風物の美をそこに直観はせず、——いやしくもそれのかもしれないす美の範疇についてかたりうるかぎり——、えもいへぬ自然への畏怖や不吉な識にくまどられた妖美とでもよぶべき感覺的幻想にうちまかされたことであらう。いな、——たとへば、都会のあはしい感傷といったならかの近代的情調のその象徴になりうるかもしれないところの、そそりたつ高層建築のはてにほのかにかつたくらい、虹でははなしが別になるが——太古そのままの澄明な自然をいろどる虹の、その目をあざむくうつくしさなら、それは、日ごろの近代的な生活の感情からわれわれを解放して、むしろ異様な感覺の幻想へひとをさそひこむことであらう。たとへば、つぎのごとき文章は、現代人の感覺としてそれを氣がいたものである。

峠を越えていまだ人里遠い岨道をずっとだれにも逢はないで、下に幽谷の潺湲を聞きながらたゞ独りくだつて行つたわたくしが、忽焉として眼の前にあだかも山峽を繋ぐがごとくけざやかな虹のかかったのを見たとき、わたくしは周囲の自然全体に圧されつゝ、一瞬、神秘の雰囲気のなかへ抵抗を失つて吸ひこまれさうな幻覚を感じた。それは、たしかに一瞬の出来事ではあったが、途端にあとさきの時間が消えてしまつて汎神論的自然美に魂を奪はれた、さういふ怖ろしい一瞬でさへあつたといふまざまざとした一つの憶出である。

とはいへ、この神秘なふんゐきとは、やはり近代人らしく、もつぱら唯美主義的な創作童話風な幻想である。万をもつてかぞへうる古代の和歌の作品のなかに、虹の美をとりあげたもののみだしがたいのは、偶然ではないであらう。

さうとすれば、このやうな事実を背景として、ここでは、ある幻想の社会的に客観化された形態がそれに対応するものとしてのある(慣用的)言語形態を生む事態をも想定していいであらう。

古代人の幻想の歴史をこころの内奥をあばくかたちで再建しようとするのは、えてしてゆめみがちな民俗学者にみられるところのもともより科学の埒をふみこえる冒険であつて、されば、そこから生まれるうつくしいおはなしに対しては否定も肯定もするすべをしらないといふべきであるが、虹の現象を蛇のごとき畏怖の対象とむすびつけた解釈が、いまだとりとめもない animism の神秘の世界に人間の住んでゐた段階をある程度克服して一個の知識としての口碑のかたちで、つまり民衆の素朴なるひとつの知慧と

して、確立されたのは、ずっと古いこと、すでに古代においてのことであらうこと、これは想定できる。それを自然現象の一個の説明とみれば、これもこれなりに古代の科学知識ではある。そのうへ、また、つとに既成の教理の否定もみられる(塵袋)。そして俳諧が《蛇の息》を、たとへば、醉漢の熟柿のほひにとりなしてもあそんでゐるにいたつては、それは、もはや、その価値において、ばかげたくちずさみのたくひとならえらぶところのないものである。俳諧の笑ひは、あたかも封建社会の庶民精神を反映して、そこに理論的な否定をふくんでゐるが、はるかにこままでくだつてくれれば、すでに俗信の古代的權威はまつたく地に墮ちてゐる。いまは、ひろく民俗に関することや文学作品の解釈にわたることにまではふてをおよぼしえないけれども、それはそれとして、ここにわたくしのいはうとするところは、たとへば虹に関する觀念の変遷も、要するに根本においては、ことばの意味の歴史にかかはることがらであり、ある意味では、このやうな面こそ《意味》の歴史をかたちづくるその重要な内容となるところのものであるといふことである。そして、じつは、意味の研究は一面、すべて直接にある社会生活を反映する慣用の研究とみられるといふふくみからすれば、これは、よかれあしかれ、二十世紀の主流をなす狭義の言語学に属するものではなく、むしろ民俗の研究——たとへ文献学的であれ——の一分野である。すなはち、意味の研究はすぐれて民俗の研究であるといひうるのである。譚詠論なども、意味論的にはこの基礎にたつて考ふべきものであるとおもふ。最後に、ついでをもつて批判的言辭をあへて弄するなら

ば、あたかも逆説のごとくになるけれども、じつは、意味の研究
がかかつて民俗の研究となるべきであるかぎり、佐竹昭広君のす
ぐれた研究のしめしつある独自の方向が、他面へあまりに『民
俗学』的にながれることのないやうにとそれを老婆心ながらわ
たくしとしてはここに希望しておきたい。

(亀井)